

昭和四十五年五月十七日 ご講演

## 「日本文化史の特徴」

先ほど、塾長からお話がありましたように、もう和敬塾が十五年もたったかと思えますと、実は、私もなかなか感慨の深いものがございます。誠にこういう立派な所に、十五年もの年を閲しただけでなく、いよいよ盛んになっていくことは、おめでたいことでございます。

今日は塾長に何か話を、ということを頼まれて、ひとつ皆さんの思想の上にいささかでもお役に立つようなことを申し上げたいと思つてまいりました。ただし、法・文・経、あるいは理・工といろいろな方面におられる諸君のことでございますから、特別に専門的な新しい知識を申し上げますよりはさらさらでございます。もう誰でも知っております普通の知識を総動員いたしました、そうして諸君が残念ながら聞いたことがなからう、少なくともあまり聞いたことがなからうと思われまふ見方、特に日本の文化史の特徴について、申し上げますという所存であります。

一体、我々人類の文化というものが、最近の科学的な技術、テクノロジーはどこでも類似は

いたしておりますけれども、さて、芸術だの、国家形態だの、あるいは政治形態だの、法律だのと、その他精神的な文化面を見廻すならば、皆、所によつて違つてゐる。つまり、民族によつて違つてゐるということは、これはまぎれもない事実であります。良いとか悪いとか、本当だとか嘘だとか、こういうことを離れまして、厳然たる事実であります。我々がヨーロッパを旅行すれば、南のギリシヤ、イタリーから始めて、北はスカンジナビアあたりに行きましても、何か博物館等に入りますと、一体どの国にゐるんだらうという錯覚を起こすほど、類似いたしております、確かにあそこには、ヨーロッパという、一つの共同の文化がございます。アジアは、かつて岡倉天心が、アジアは一つなりとは申しましたが、残念ながら、文化は一つではございませんで、仏教、あるいはイスラム、あるいはブラアマニズム、種々雑多でございますが、確かにヨーロッパは一個の共同した文化を持つております。

にもかかわらず、よく見ますと、フランス

文学博士 日本大学教授 高山岩男先生

文化とイギリス文化というものは、非常に違う。国境の接しております、あのフランスとドイツを較べると、やはり学問も芸術も、物の考え方も、著しく違うのが、これが事実であります。諸君も学問に通暁して、駆け出しの状態から専門家に飯になつたといえますと、やはり、イギリスの学問、フランスの学問、それからドイツの学問の姿というものが、違うものだけだということが皮膚で分かるようになるものであります。一面では、非常にヨーロッパ的な共同性を持つ中にも、優秀な民族はそれぞれ特異な、そして独自のユニークな民族文化を形成しているものであります。

そこで、どうしてそういう相違が起こるのかということですが、これがなかなかの問題でございます。こういう問題に頭を悩ました学者ももちろん少なからずいるわけですが、実はあまりこういう方面の学問が発達いたしているとは申しあげられないのです。なにしろ、ヨーロッパ人はヨーロッパの歴史と、ヨーロッパの文化をだいたい材料にして、いろいろな議

論を形作ってしまいます。たとえば、「中世封建制度」であります。そうして、封建制度が内から崩壊してルネッサンスになり、近代になった。これはヨーロッパの歴史であります。後に申し上げますように、実は我が日本が例外的にヨーロッパと同じような文化史的発展をたどっているだけでありまして、それ以外は「中世封建制」だなんてものがあつたところはございませんし、したがって古代を復興するというルネッサンス、文芸復興があつた例はございません。ところが、ヨーロッパ人は自分たちの属する文化を材料にして、何か歴史の発達の法則みたいなことを、まあ、早呑み込みに考えてしまつて、「人類というものが皆、そういう過程をたどるんだ。アジア・アフリカの低開発民族がまだたどっていないのは、我々の古代時代にあるからで、やがてはたどるんだ」と、実はインチキの説でありますが、こういうようなことを考えているありさまです。

日本の大学というものが、まことに残念なことではあります。明治以後、横文字を縦文字にすることをもつて職といたしておりますから、西洋人の思想を批判的にみるという風潮が、学界にまだあまり育っておりません。そこで、アジアの文化、わけても日本の文化とヨーロッパの文化がどう違うのだろうか、どこからそういう違いがでてくるのだろうか、というよう

学問的研究というものは、残念ながら発達してないのであります。

どういうわけか、私は若い時から、この問題が気になりました。もうよほど昔の事ではありませんが、卒業してまもなく文化類型学などというものを考えて、かつて本にいたしましたこともあります。しかし、やはり戦争に負けてみますと、ヨーロッパの文化こそ、ザ・カルチュア、あれこそ文化なんだ、日本の文化なんていうのは嘘なんだ、ビター一文の値打ちもない、とこういうムードになりました。諸文化の差異が生じてくる根元の研究というものが忘られるようになってしまつたが、数年前、七、八年前あたりから、文化人類学というようなものが、やや盛んになつてきたようです。私が申すような学問研究の入り口あたりまで、——まことに結構なことだとは思いますが——、来ているようでございます。で、今、詳細な学問上のことを申し上げるのではなく、さつき申し上げたように、諸君の知っているまことに平凡な常識を少し思い出していただいて、そういう問題に対する考え方を申し上げてみたいと思つております。

具体的実例をとつてみましょう。戦後は猫も杓子もデモクラシーということをいいます。諸君はまあ戦後生まれましたから、小さい時の事はご存知ないかも知らんですが、デモクラシーをいわなければ、夜も日も明けられないという

が、戦後の日本の状態であり、今でも続いております。反民主的、あるいはもっと積極的に封建的であるということが、かつての非国民にあたるほどの悪口の形容詞となつていっているわけです。憲法違反だというと、ちやうど、かつての不敬罪にあたるような威力を發揮しているのが戦後でございますが、これは憲法以上のものを皆つぶしてしまつた結果、憲法に違反することが、不敬罪と同じようなつもりでおるようであります。で、今、その夜も日も明けんようなデモクラシーをとつてみますると、一世の中にザ・デモクラシー、——まあ、このごろはザ・ピーナツツなんていうように、盛んに英語の定冠詞をつけるのが流行しますが、ここで申し上げるのは、単数の定冠詞でありまして、いわば抽象名詞を造るもので、民主政治そのものでもいいますか——そういうものがどこにあるんだいと、こう考えてみまするならば、ここに諸君の疑惑が湧いてくるだろうと思ひます。誰でも知つていられるように、デモクラシーはギリシヤに発生いたしましたものであります。これがローマに受けつがれて、そうして消えまして、やがて近代になつて西洋の国々、わけてもイギリスあたりを源として、近代デモクラシーとして復活したわけでありまして。

さて、そのデモクラシーの成功している国、これはもうとつとくに亡くなりましたジエーム

ス・ブライスという有名なイギリスの政治家兼政治学者の書いた大きな『モダン・デモクラシーズ』という複数でできた書名の本の中に、十幾つをあげております。今日、地球上、世界で百三十幾つかの独立国があるようですが、いまだに頑固にデモクラシーを拒んでいるスペイン、ポルトガルのようなファッショの国をのぞきますならば、たいいてい民主政治の形式をとっておりません。しかし、戦後の新生独立国はほとんど遺憾ながら失敗していることは、皆さん、スカルノ大統領のインドネシアから、エジプトのナセル、さらにアフリカの諸国を思い出してごらん下さい。皆失敗いたしております。やはり戦前派の十幾つが成功しているというよりはかはありません。

この国々の民主政治というものの形態を仔細に見ますならば、それぞれ皆、違っております。一つとして同じものはないのであります。たとえばイギリスとアメリカは、いわば東西の横綱のような国とされておりますが、確かに民主政治の優等生でございましょう。そのイギリスをとってみれば、中学生だつて知っているはずですが、イギリスの上院は貴族院でございませぬ。イギリスには未だに貴族制度がございませぬ。諸君は記憶がないと思ひますけども、かつて労働党の党首として働いたことのあるアトリーという人が、老齢になった時に、女王からサー

という称号、つまり貴族に列せられました。そして、サーを貰ったとたんに、貴族院議員となつてはいます。日本では、ちよつと考えられないことですね。さらにその貴族の子弟が入りますの特権学校、これを普通パブリック・スクール、——名前は体を表わすとはよくいいますけども、これはパブリックではなく私立学校です——、イートンとかハローとかいう有名な学校があることは、諸君もよく知つておられるでしょう。この学校を出たような、特権階級の連中が、オックスフォード、ケンブリッジに入つて、ジェントルマンになるわけでありませぬ。こういう具合に未だに貴族制度があり、貴族の特権学校があり、その貴族のトップに位しているのが王室なわけでありませぬ。そういたしてみますると主権が王にあるのは、モナーキーであり、貴族にあるのが貴族制、アリストクラシーであり、人民にあるのがデモクラシーだと、植物より簡単な分類で人間の複雑な政治・国家形態を分類している。この分類では、ちよつと理解ができていくということがおわかりだろうと思つておられます。案外、誰でも知つておられる事実の上からでその結論が、諸君の頭になし、学校でも教えない。教科書にも書かんし、学界でも議論しない。まことに不思議であります。

主権在民であるというような、そんな簡単なことで、イギリスの民主政治が理解できる道理

がございませぬ。イギリスの憲法は、これまた、誰でも知つておられる常識であります。近代憲法というのはございませぬ。また、造るうともしない。マグナカルタ以来の、重要な法令を集めて、綴じこんで、これを憲法だといつておられるだけの話であります。これを小憎らしいほど、柔軟な解釈をした上に、たくみに民主政治を行なつておられる、これがイギリスでございませぬ。

ついでにアメリカを見てみますと、これは七十五点位の民主政治だと思ひますが、これも横綱にあげておいていいでしょう。アメリカの民主政治が、とにかく優をもらう程度に続いているのはなぜだろう。出稼ぎ人が集まり、移民が集まつて、そしてできておられるあの国が、民主政治でうまく生きておられるというのは、どういう理由だろう。こういうことを、諸君が社会科で聞きになったことがあるかどうか。これは大問題です。アメリカとは何ぞや、ということが大問題でありますし、アメリカに「デモクラシー」というものが成功したのは何故か。これは面白い、しかも重要な学問的問題なのです。これは誰でも知つておられる知識を動員すれば、少なくとも基本的な解答は出てくるのです。アメリカはノーマンズ・プレーン、無人の原野なんです。わずかのインディアンはいたでしょう。中南米になればインカ帝国というような所もあつたことは事実である。ですが、デモクラシーが成功し

ているのは、わずか合衆国とカナダ位でありまして、中南米、つまりスペインおよびポルトガルの支配した国は、これはもうすべて失敗。クーデターに明け暮れている。クーデターが、政変の方法になっていると申しても間違いのないような状態になっているという事は、新聞を見ている諸君にはすでにご承知のことです。

さて、その北米はノーマンズ・プレーンである、これが一つ。さらに歴史が無いんです。アメリカに中世があったか？ 冗談じゃない、歴史が無いんだから、中世もなければ古代もなく、封建制度もなければ、王制もないんです。歴史的真空といっていいんです。諸君が物理学の実験の時に、真空状態を作って利用するという事は、よく知っているでしょう。ただ社会・歴史の学問の分野では、真空状態を作って実験することができないのですが、ここに特殊な例外があったわけです。それが実にアメリカ大陸、わけても北アメリカであったわけでありまして。歴史がない、歴史的真空の状態に移した連中の指導者たちが憲法を作り、独立運動をやり、そうしてアメリカン・デモクラシーを作ったわけでありまして。ジョン・ロックの理論を、いわば、まあ実験して、それが実現するほどうまくいったのは、歴史的真空という特殊な条件に基づいているという事は、明瞭であります。これは誰でも知っている知識であるはずなんです

すが、さあアメリカン・デモクラシーというのが、歴史的真空の状態でできたから、あんなったのだという知識は、残念ながら聞いてみると、持っている人はほとんどいない。第三には、あそこにはいろいろな人種が集まったわけでありまして。人種の坩堝などといわれますように、人種の展示会と申してもいいでしょう、それほど集まっております。こういう連中が、それぞれ「おらが国さ」のなんて言って、自分のオリジンの民族を鼻にかけて、自分の民族の文化、

伝統、慣習、歴史なんていうものを持ち出したら、どういうことになるでしょう。えらい混乱状態になって、ユナイテッド・ステーツ・オブ・アメリカというのができっこないのです。ですから、英語だけは共通の国語にいたしました。後は自分の父祖、自分の民族の伝統・歴史は移民する時に、親の国に全部置いて、自分は完全な裸になって、裸一貫のアメリカ人になって、そうしてあそこでよき社会を造ろうじゃないかと形成してきたのが、これがアメリカのデモクラシーがうまくいっている第三の理由だと思ふのです。こんな多民族性、移民からできている、そして移民がみな自分の「おらが国さ」という考え方を棄ててきているということが、誰でも知っている事実なんです。その上にアメリカン・デモクラシーというものが成功する基盤ができたんだということが考えられないと

いうのは不思議な話ですが、まあ、こんな一つ、三つの重要な条件がそろって、これでアメリカはうまくいっている。

さあ、そこでアメリカのデモクラシーというもの、そういう珍無類の歴史にない前提条件の上に立っているとすれば、アメリカン・デモクラシーの公式を何処かの国が真似ができるかといえ、絶対に真似できないというのが、歴史的結論になるわけなのです。ちやうど、イギリスの憲法を他の国がマネできないのと同じなのです。イギリスのジョン・ロックの理論がアメリカでは実現されましたが、当のイギリスでは今注意したように、貴族制度も残っている、王制も残っている。王制のいい所と貴族制のいい所とデモクラシーのいい所をいわば統合したようなものが、イギリスのデモクラシーになっているわけでありまして。ですから、ちやうど衣服・住宅・食べ物料理の仕方がそれぞれ地域、風土で違っているように——違っていないければ大変です。まさか、支那大陸のゴミっぽい中でサシミを作って喰う、なんてことをやったら、翌日は下痢で死んでしまいます。日本のような所だから、生魚を喰うとか、サシミなんて料理ができたわけで、衣・食・住という日常の生活文化さえ所によって違っている、違っていてこそいいように——やはり一国の政治の形態というものも、イギリスではイギリ

スだから百点でも、他にいけば二十点、三十点にもならない。アメリカでは八十点だが、他の国がこれを真似ようとしても、まあ真似られないのですが、馬鹿な民族が真似れば、これは目も当てられん、三十点か四十点だと、こういうことが生じてくるわけなのであります。

こういう事実、これは本当は文化史のイロハなんです。あるいは広くいつて歴史のイロハであります。何もむずかしい理論ではなくして、誰でも知っている事実であるはずなんです。これを戦後の日本人は一体忘れていやしないだろうか。ザ・デモクラシーのようなものがあるように考えてはいないだろうか。そうして、一生懸命、ザ・デモクラシーというものやら、日本も民主国になるといふふうな錯覚を、反歴史的・反文化史的な愚かな所作をやっているのではないだろうか。「お前のいう民主政治というものは、一体具体的にいうとなんだ」ところ突つ込んでいくと、たいていアメリカ方式、プラス、イギリス方式、割る二というふうなまことに知恵のないことになっていそうに見えます。このデモクラシーがいいという、文化史と歴史のイロハを忘れている人、あるいはそういう教育がどうもいまだに続いているかのように見えるのであります。こういう点を諸君に真面目に研究していただきたいように思うのであります。

次に少し今度は角度を変えまして、一体、民主政治というものが、万国共通、人類普遍の政治原則であるのなら、——どうも人類普遍の原則であるなんて、どこかに書かれていますから、そういう考え方が日本人の中に入っているように思います。そしてまた、学校では諸君がそういう講義を聴いているんだろうと思えます。——、一つ疑問をだしてみたら、どうかと思つたのです。先ほど申し上げましたように、これはギリシャから発生している。しかもそのギリシャでも、スパルタには発生しませんで、これはアテナイに発生して、あちこちに行なわれたものです。さあ、そのギリシャ、わけでもアテナイ、こういう国は一体どういうものだったんだろうということを、地理的・歴史的に見てみるならば、これも何も難しい知識ではなく、高校時代に先生が、もしよき先生ならば、注意して教えてくれたであります。が、ギリシャはなるほど、地理的にいつて半島であります。ですが、ペロポネソス半島といわれる所があるように、もう島国に近いような半島であります。そして、そうして東の方は多島海であります。ここであの優秀なギリシャ人がやがて地中海を股にかけて商業貿易をやったのです。いわばこれは海洋民族です。実に海洋性に富んだ民族で、大陸民族の逆だといつてよろしい。日本やイギリスは島国でありますから、初めつから海洋性

に富んだ民族でございますが、ギリシャもまことに海洋性に富んだ民族、いわば、シー・パワーであります。ついでだから申し上げますが、スペイン、ポルトガル、これはイベリア半島で島国ではありませんが、ルネッサンスのころには実に海洋性を發揮いたした民族であります。今は衰微してイベリア半島の突端に逼塞しておりますけれども、かつては日本の一番近く、台湾・小笠原あたりまで来たのは、実にスペインであります。これが世界中を征服して、イギリスの前に海洋帝国を造つたわけでありませぬ。だからこういう民族も、半島民族ではありませんが、ある時期には非常な海洋性を發揮する事がある。これが歴史の事実であります。頭に置いて置いて戴きたい。

ノルウェー、デンマークについて。デンマークはまあ島国に近いような半島民族ですが、半島民族であるノルウェー、これが実に海洋性に富んでいる民族であることは、今さら僕がいわなくても、諸君が百も承知の事実であります。バイキング、この頃の諸君は料理の名前として知っているかも知れませんが、あれは海賊の名前であります。地中海を股に掛けての海賊といましても、昔は商業というものは、半分海賊のようなものでした。日本でも朝鮮半島から支那沿岸にかけて出たものを、支那人は倭寇と申しまして、日本の海賊と申しましたが、実は半

分は貿易、半分強奪というようなものでありまして、どこでもそうであります。海軍の始まりは、実は海賊なんです。今そういう所を詳しく申し上げます余裕はありませんけれども、とにかくノルウェーというものが、南極探険、北極探険、バイキングと非常に海洋性を發揮し、船舶保有量は、第二次大戦までは世界第三で、日本より多いんです。島国でなくても、これほどの海洋性に富んだ民族という事例であります。

デモクラシーがギリシャから發生した、ギリシャは海洋性に富んだ民族であり、商業民族であるというこの二つの間に、何か因果關係がないのか、何か本質的な不可分の關係がないだろうかと、少し学問のある者なら、考えてもよろしいと思うのです。デモクラシー、リベリズムという自由潤達な精神的雰囲気というものは、やはり海洋性に富んで、貿易、商業をやるような民族で發達するものでありまして、これでデモクラシーというものが生まれ出るのがあります。だからイギリスにおいて、民主政治がうまくいつているという理由、原因には、私は、やはりあれは、ゲルマン系ではありますけれども、島国に生活している、貿易が生命である、海軍がこれを守っている軍隊だということふうなことで、やはり不可分な關係があると思うのです。

そこで今度はこれを裏返しにして、逆の方が

ら考えてみればいいんです。一体、大陸の民族でデモクラシーがうまくいったか。一体、大陸で民主政治が生まれたのかと、こう逆に問うてみると、どうですか。これも諸君が高校までにチャンと知っている知識を動員すれば、答えが出るのです。かつて中近東に初めて人類は大帝国を造った。チグリス・ユーフラテス河の付近に造ったり、あるいはエジプトのナイルの河に造ったり、さらにずっと東に来れば、やはりインドにも帝国があり、さらに支那大陸には漢民族が、あるいは塞外民族が漢民族を征服して大帝国を建てた。あるいは草原地帯のスラブ民族の住んでいた所には、やがてロシアという国も生まれた。そのロシアが帝政ロシアをぶち壊して、ソ連になり、今日大帝国ができております。帝国とはいいませんが……。

まあ、こんな事を頭に浮かべて、大陸の国家というものは、デモクラシーをやったことがあるか、あるいはやつてみて成功したことがあるだろうか。こう問うてみると、大陸からは絶対にデモクラシーは生まれておりません。そしてまた、今から申し上げるように、成功したことがございません。革命前の帝政ロシアは専制政治です。そうして今度は人民民主主義を掲げたプロレタリア革命を行いました。レーニン、スターリン、そして今日まで、あそこにデモクラシーが行なわれたことがあるでしょうか。共

産党独裁であります。やはり独裁専制の政治であつて少しも変わりばえのしないものです。大陸国家とはかくの如きものなのです。大陸国家は歴史の事実が、——良い悪いをいつているのではありません——、実に専制政治が本来の形で、これだとうまく行くんです。これは砂漠民族の場合も、草原民族の場合も農耕民族の場合もそうでございます。そのデイスポティズム（独裁）の政治形態の中から、名君、名宰相、名臣がでて善政を施しすれば、時には暴君が出て、ひどい政治をやるわけでありまして。何だか知りませんが、デモクラシーといえは黙つても良い政治、善政がおきる形態であり、デイスポティズムといえは黙つても悪政の模範であるような嘘を、諸君が教わつてはいはしないだろうかと思ひますが、支那の歴史を見てご覧なさい。名君、名將がでて善政を施したデイスポティズムもあれば、あまり歴史に残つてはいませんが、桀（けつ）・紂（ちゆう）などというネロみたいな暴君が出たこともあるわけでありまして。もつともネロというのは嘘が伝わつていて、暴君ではなかったという歴史学説もあるようですが、デイスポティズムはデイスポティズムの良さがあつて、善政も施せば悪政にもなるわけです。

デモクラシーもうまく行けば善政は施されますが、ひよつとするとすぐ悪政になつてしま

うのです。あのアテナイがペリクレス時代にデモクラシーの花が咲きましたが、やがてまもなく賢人ソクラテスをば、全く罪なくして、アテナイの市民が——当時は民主的な陪審員制度でありませんが——、これを有罪とし、ついには死刑にしてみました。これを二十歳前の弟子のプラトンが見ておまして、つくづくと考えた結果が、プラトンの有名な「哲人政治論」になったわけでありまして。「本当の政治家、王様というものは哲人でなければならぬ。デモクラシーは駄目だ」というデモクラシーへの批判がプラトンからでているのです。おそらく諸君は、プラトンの「哲人政治論」はどこから出てきたかという事実を聞いていないだろうと思うのです。西洋の学者も知らない、そして横文字を縦文字にするしかなかった日本の学者も、また知らないようありません。実にプラトンの「哲人政治論」はデモクラシーの批判から始まったものなのです。

まあ、こういうように、何もデモクラシーは無条件に善政の形式ではなくして、善政もできるが悪政もできるのです。海洋民族はデモクラシーになりうる素質を充分に持っているが、大陸民族はデモクラシーの政治形態をとるのが非常に困難だともいえます。禹(う)という名君がいて黄河の治水をやったという有名な神話・伝説があります。あの禹の治水が、一体、

デモクラシーでできますでしょうか。議論を朝から晩までやっているは、とてもできっこないんです。それをやるうと思うと、ちょうど日本で成田に空港を作ろうと思うと騒動が起きるように、治水で損をする者もおりますから、「俺は反対だ」「大いにやったらいい、俺は賛成だ」と利口者と馬鹿者が毎日議論をして、何もできないわけでありまして。やはり禹という賢人が出て、独裁的に治水をやるのでなければ、何もできないのが大陸であります。ですから、ここにやはりデモクラシーというのが、海洋性に富んだ民族には、まことにふさわしい政治形態であり、それに対して、大陸に国家を造っている民族には、やはりデイズポイズムの方がむしろ合っている、体質的に合っているといううなことが、歴史的な事実から帰納されてくるわけでありまして。だから、今の毛沢東の中共が、非常に民主的だと諸君はそう思いますでしょうが、これは全くのデイズポイズムなんですね。毛沢東は神様で、しかもスターリン以上の非常な神様というわけですね。何も変わればえはないんです。

ここでちょっと微妙な変わった例を一つヨーロッパからとってお話しておくと諸君がいろいろ考える上に役に立つかも知れない。

ドゴールは、昨年五月とうとう国民投票で失敗いたしました。退陣いたしました。一昨年は

諸君に記憶がございましたが、ナンペール分校から大学騒動が起きて、これがあつというまにフランス各地に類焼し、やがてドゴール信任という大騒ぎになりました。そこでドゴールは尻をまくって、嫌ならやめるという手に出たわけですね。国会を解散して信任か、不信任の投票をやれというように。そうしたら、フランス革命で国民議会ができて以来、未だかつてなかったような大多数をもって、ドゴール信任が成立したわけですね。これも知っているでしょう。まあ、これ位の記憶はあるでしょう。一体、フランスは何のために騒いだのか、さっぱり分からない。当時は新聞記者たちが何か説明しなければ飯を喰えなくなる不安があるのか、いろんなことをいいましたが、私は学生諸君に、説明はつかんというのが本当の説明なんだといったのです。あれがフランスの兄ちゃん気質なんだという説明をしたのです。

これは諸君には記憶がないでしょうが、ドゴールが政界に乗り出す前のフランスの政界、当時の状況というものは、内閣の寿命、平均三ヶ月といわれるような短命内閣でありまして、小党分立でわあわあやっていたのであります。皆連立政権でありますから、すぐ総辞職。何一つ長期的な国策というのができぬ国であったのであります。まずフランス・リベリズムの悪いところが、ごっそり凝結して出たようなのが、

当時のフランス政界の状態だったのです。ですから、今のベトナム、ラオス、カンボジアにありましたフランスの植民地である仏印を手離すことをしないで——馬鹿だから、植民地など手離せば、ドイツだの日本のように盲腸や癌を切るみたいに健康になれるのに、フランスは仏印に執着いたしました——、多大な軍事費を国費から出していたのです。陸軍士官学校を卒業する青年将校の数だけ、毎年仏印で死んでいたわけでありませう。それがディエンビエンフウで負けたものだから、嫌々ながら棄ててしまった。

さあ、残っている癌はアルジェリアです。こゝはかつての日本における満州のようなものと違つて、一世紀以上フランスが半分を自分の属国、領土にしていたような国であつて、ほとんどの軍人はあそこで訓練をいたすようなものでありますから、軍部は絶対にこれを独立させるということを許さないので。まあ、とにかくそのためにえらい動乱があり、反乱があり、抵抗があり、復興もままならない馬鹿な状態にあつたのであります。そういうフランス自由主義の悪弊がもう頂点に達して、にっちもさつちもいかないうようなものですから、ドゴールが出現してみると、もうすばらしい票数で大統領になりました。そしてこれも軍人が応援したわけでありませう。ドゴールは我々の大先輩だ、アルジェは絶対に手離さないというので軍人はドゴ

ールを選んだのであります。選ぶとすぐ憲法改正と第五共和国を造つたわけでありませう。どこの国の様に、憲法は絶対に改めては悪いなどという国とは違ひまして、憲法というものは、政治のためにあるのだから、時局に合わなければ修正するというのが近代憲法を創つた国々の考え方で、極東の島国ナントカという国だけは決して憲法は改められない。永久にこれを護持し、千古不磨の大典であると称している馬鹿がいる。ドゴールは憲法を改正して、いわば君主に近いような、皇帝に近いような権限をもつたわけなんです。そうしてすぐにやつたのが、アルジェリア解放なんです。怒つたのは軍部で、これは諸君は記憶にないでしょうが、ドゴール暗殺というのが何遍も行なわれたのです。悪運の強い男で、結局、何事もなくすみましたが、パリにはアルジェリアから空輸されて陸軍が占領するだろうなどという噂がいくらも飛んだものです。ところがそのドゴール先生、アルジェではどかんと原爆の花火をあげて、国威を発揚させた。さらにはアメ公帰れというふうな反米の言辞も弄し、少なくともNATOの旗がベルサイユに立っているのは癩の種だと、とうとうこれをベルリンに移させてしまったでしょう。そして、NATOからは脱退はしません——これはよく新聞などが違つて報道しておりますが、ソ連の脅威をドゴールはよく知っ

ておりますから、NATOは絶対脱退はいたしません、司令部はフランスから他に行つてくれと、こういうことなのです。さらにモスクワを訪ねては、ウラル山脈以西がヨーロッパであると、奇妙なドゴール地理学を披露して、ソ連との交わりを深めるといふような、いろいろなことを作りまして、少し大げさに言えば、ナポレオン以後の、まず国威の発揚を行なつたといつていいような、どこにも文句のつけようがないですね。それがナンペールから学生騒動が起きると、どういふわけかストライキが起こり、そのストライキがみるみるゼネストになりました。大学騒動とゼネストとは何の関係もない。学生がいい気になつて工場にいつて応援しようとする、労働者がこれを皆追つぱらつたでしよ。手前たちなんてくるなと、こゝういふんで、まるで関係がない。

まあちよつと申し上げておきますと、学園騒動というものは、諸君も非常に関心があるでしょうが、ヨーロッパには中世大学があることを知つていますね。これも、誰でも知つている歴史的知识なんだが、なにかヨーロッパの大学は皆、近代大学だけのような錯覚を懐いてはいませぬか。十二、三世紀から出た古臭い中世大学が近代大学と混在しているのです。そうして日本では、かつて軍部が統帥権の独立といつたように、大学の統帥権、自由自治ということを百



パーセント主張している。大学以外の人間は一切入れさせないような方式をとっていますが、ヨーロッパは——これはアメリカもそうでありますが——立派に市民の発言権も認めている国であります。ただ、そういう国で学生参加の古臭いヨーロッパの伝統——彼らにいわせると意味もあるんですが——本当の騒動の原因というものは、フランスが戦後、生めよ増やせよという人口増殖運動をやりまして、そうしてそれが今、二十歳頃になっているわけです。まず大学年齢になってきたわけでありまして。富は上つていく。福祉国家になっていく。大学に入りたという学生の数が非常に増したにもかかわらず、我が日本とすっかり考えが違っておりまして、建物や机や本を置いたところで、大学というものはできない。大学は研究、教授の立派な学者に養成されて大学になるのだ、とこういふのです。大学を少しも増設しなかつたのであります。あそこは私立がございませぬ。公立が二十あるんですが、少しは増やしましたが、大学の数を増やさない。ですからソルボンヌ大学の学生あたりは、窓の所に手を掛けて講義を聞いているなんて噂を聞いたことがある位です。我々が旅行が許されるようになった時、私もすぐ旅行いたしました。公園に行つてみると、まるで年子のような子供を持った細君が多いのに驚きまして、私はいろいろ聞いたり調

べたりしているうちに、驚くなかれ、生めよ増やせよという政策をとったんであります。フランスというのが、グリーンと人口が下がっていた国なんです。ドイツというのは上がっていた国で、したがって、ドイツの人口の重圧が、フランスにかかつていたものであります。それで人口増殖運動というのが起こったのです。

ついでに申し上げておきますが、仲々ふるった増殖運動でありまして、ひよつとすると諸君も中学生あたりのころから、子供が生まれなくなる老齡民族があるなどという説を聞くかも知れません。私もかつて読んだことがあります。が、フランスはその例にあがっているのです。まあ確かにインディアンだのアイヌだのといった人種が、死に絶えていこうとして、どこでも保護いたしておりますが、フランスも老齡民族かな、と私も思っていたんです。ところが行つてみるとそうではないんです。それは日本流にいえば、一人子供をもうければ、家族扶助手料一万円を出してやる。二人ならば二倍なんてケチなことはいわなくて、二倍半、二万五千円やろう。三人子供をもうければ、三倍だの四倍以上の金を、四人も子供を生めば、親父は働きになんかでないで、朝から晩まで家にいってもっぱら人口増殖に専念すればいいというような、フランスという国はどうしてこんな極端なことをやる国なのだろうと、ほとほと感心をするよ

うな人口増殖案をとったわけでありまして。するとみるみる増えるんです。ですから諸君が将来国家の政治等に関与する時になって、どうしたら人口増殖が行なえるかという案は、これで解るでしょう。今、日本は世界一人口が激減している国であります。しかし増やそうと思えば、何も心配はいりません。今いったようなフランスの故事を做えば、ずつと人口が増加していくわけです。まあ、こういう大学人口と大学の数のアンバランスから、実は大学騒動が出ているんで、日本の様に建物だけはあつて、以前は駅弁大学、この頃は八百幾つもあるから駅弁より多いのでガソリンスタンド大学といつたらどうだという評論家もいるようではありますが、そういうのとは違ふのです。

まあ、それはその位にいたしましたして、とにかく何の批難するところのないドゴールの政策に対してより、ドゴールが十年も高い鼻を一層高くして王座に坐つていると、それだけで胸がムカムカとしてくるのが、フランス人というか、フランスの兄チャンなのです。ですからして、何の欠陥もないのに、ドゴール不信任なんてとこまで行く。尻まくりされると、今度は国家開設以来の驚くべき票数でもって信任する。まことにフランス人というものは、二流民族ですね、こうなると。……私が申したいのは、そういうことよりも、あのフランス、フランス文化を生

んだフランス人でさえ、やはりデモクラシーの落第生ではないか。リベラリズムの弊がきわまると、独裁君主を選びたがるし、——選んでいゝる——選ぶとまた、奇妙にうまくいくということなので。かつてはジャンヌ・ダークが国を救い、ナポレオンが国威を發揚し、今日、ドゴールがまた發揚したというような調子で、いよいよ国が危ないという時に英雄がでてくる。またこれ奇妙な国であります、出てこなければ亡びるに違いないんです。

私はそういう、つい最近の諸君が知っているようなフランスの事実を念頭に置きまして、フランスでも学者で民主政治は何かということについて議論した思想家はいくらでもおりますが、当のフランス人は、デモクラシーの落第生というか、あるいは及・落のボーダーラインをさまよっている民族だと思つてます。ドイツは、これは五十点程度の落第生であります。今はこれは省きますけども、やはりロシアだの、支那だのというちよつと下の国をとらないで、こういうヨーロッパの一流の大陸国をとりましても、かくのごときものなんです。

さあ、そこでこれだけの結論が一応諸君に伝わったと仮定いたしますと、一体日本はどうなんだという問題になるわけです。なるほど、民主政治、「アメリカ流」＋「イギリス流」割る二みたいなものをとり入れて、戦後やっており

ますが、はなはだうまくいかないのですね。つい最近足蹴りや手で殴るといふ乱闘もなくなつてきてはいますが、そういう記憶は諸君にもあるでしょう。まあ、去年でも大学法案が通る時にもすごいところまでいったが、あれ以上の殴りあいというものが、何遍も行なわれた。そして、元来民主政治は多数を取つた政党が、自分の政策を実現するのが主旨なのでありますが、「多数の暴力」なんていう概念を作つて、新聞まで騒いでいるありさまで、どこから採点してみても、戦後の日本が民主政治の及第生だとは申しかねるんです。ただ、まあクーデターが起きないのと、革命が起きないのが、及第点をつけてもいいところかも知れませんが、まず優秀なデモクラシーの国だとはいえないと思つたのです。

しからば日本民族というものは、一体デモクラティゼーションというものがうまくいかない国か、というと、絶対に私はそうではないと思つたのです。ただ、横文字を縦文字にするだけの、明治以後の大学教育の頭が狂つていただけでありまして、日本的な方式のものを作るならば、これはたいしたものになるだろうということだが、私の永年の間考へている結論なのです。そこで、なぜそんなことがいえるんだということとを、これまた、誰でも知つている知識を動員して説明してみたいと思つたのです。

日本は島国です。島国が海洋性に富んだ民族になるのは、これはまあ、自然の理です。日本はイギリスあたりのように、晴れた日にはドーヴァーの白い壁が見えるという、大陸と近い島国ではございませんで、あいにく朝鮮は見えないし、支那大陸も見えませんが、かなり距離があります。そして、シベリアの方からの気候の影響、あるいは南方に發生する台風その他の影響、さらに海流といった海の方の影響、これが日本の気候を複雑にしていることは、誰でも知つていて、申すまでもないですね。さらに温帯に長く横たわつておりますから、一方では寒帯的な影響、片方は熱帯的な影響、これが温帯で中和されて、非常に複雑微妙な風土、気候を作つているということは、これは誰でも知つている常識です。日本の文明が、わけても俳諧などが季語を重んじるということも、これまた誰でも知つています。季、季節。こんなものを重んじるという国は世界で見たことがありません。もつともこの頃は日本でも、一年中、キュウリが食えたり、ナスが食えたりして、季節感というものが、はなはだ曖昧になつてきました。しかし、なかなか大自然の季というものは変わつておりません。私、実は偶然にアメリカのモミジというものを見る機会があつたのです。モミジといいますが紅葉です。ただ、紅が赤くなくて、黄色なのです。満目、黄色い黄葉がある。

さすがに大したもんだと見とれていたんです。ところが、五分ほど見とれておきますと、「ナンテアホナ、コウヨウヤナー」。日本ならば紅いモミジから黄色いモミジまで、その間実に微妙複雑な紅葉の風景がみられるわけでありますが、大陸的な大味さと申しますか、まったく黄色だらけなのです。黄色だらけということは、それは我々日本人からすれば五分か十分位、感嘆させられる「大陸的風光」ではあります。まずすぐ飽きちまいます。日本の前穂高あたりでは、ある時期には七色のモミジがみられるのですが、何も前穂高、上高地まで行かなくても、実に繊細な赤から黄色までのモミジが見られます。いわばこれに象徴されるほど、大陸的、海洋的、寒帯的熱帯的という相反するものが日本で交わるところからくる、繊細、微妙、複雑な気候、風土に由来する日本民族の情緒生活というものは、他の民族に類の無いほど、これは繊細なものです。日本はそういう具合に、大陸的、海洋的両方の影響を受けて育っておりますが、なにしろ島国の民族でありますから、非常に海洋性に富んでいることは、古事記の神話を見ても分かりますし、さらに当たり前の誰でも知っている知識で、神功皇后の頃には朝鮮まで出かけているのを見て明らかです。あの頃どの程度の大きさの船だったかは存じませんが、とにかく揚子江の近くで戦ったという石碑

が今残っていることをみますれば、兵糧、弾薬その頃弾があつたわけではないでしょうが、とにかく兵隊を送るのに相当の船を使つたに違いないありません。あんな昔にすでに素晴らしい海洋性を発揮していたわけであります。やがて、隋・唐になり、遣隋使、遣唐使となり、奈良・平安という時代に入るわけであります。これは非常に支那沿岸に出ばつた時代であります。ところが唐が衰微して内乱が起こり、という具合にして、ひとりで平安朝で遣唐使が廃止になり、期せずして日本は、一個の鎖国状態に入ります。そうしてそれが、武家政治、源平の時代に伝わってくる。ところが室町の末期、戦国時代になりまると、今度はあちらで倭寇といわれるような、半分裂力、半分裂貿易といったような連中が、朝鮮沿岸から支那沿岸を荒し廻つた。その後には御朱印を持った船が南方の方につつと出ばつていったことは、皆さんご承知の通りです。ですから台湾に日本町ができるばかりではなく、ルソン・フィリピンにも日本町ができました。さらにちょうど今度の大東亜戦争の時に日本が出たのと同じ地域に、あちこち日本町ができました。タイには山田長政がいったことは有名ですし、さらにインドネシアのジャカルタ——昔はジャガタラといったといいますが——あそこには、長崎のお春さんという女性が行っております。

そういうように島国、海洋性に富む民族から生ずる問題でありまして、歴史は開き、縮みまた開くという事を繰り返しているものであります。文化というものは自ら作るものではなく、自然に生ずるものであります。島国に固有の立派な文化が出来難いのは原則であります。海洋民族の法意識はイギリスにおいて最も典型的に現われております、大陸のそれは実に形式的詳細に作られております。

律令が日本に通用しなかつたのはここにその理由があるのであります、幕政においては、御成敗式目五十一条、御定書百ヶ条で国を治めてきたのであります、これが島国の特徴ではないかと思つてあります。それが開国後になつて、海軍はイギリスのまねをして作つたのであります、法律はドイツその他をまねて極めて煩雑なものになつてしまいました。日本は島国でありながら大陸文化の影響をうけております。あるいは雑種文化ともいうもので、門を開いている時は大陸その他外国の文化が滔々として流れ込んで来ますが、一旦これが閉じられた時は全然入って来なくなるといふ事を繰り返しておるのであります、西洋の物指で日本の文化を計つてはならないということであります。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が  
用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、  
当時のままといたしました。